

# 生物多様性

「生物多様性」の改善に関する取り組みは、準備段階から成果が上がるまでに時間を要します。なぜなら、樹木が育ったり、植物の生育に要する「いのち」の時間を見込んで取り組みの計画を立てたりすることが避けられないからです。また、生物多様性による商品の差異化が経済的なメリットと直結しない段階でも、途中で取り組みを中断することはできません。

だからこそ、積水ハウスでは、生態系サービスや生物多様性の恵みが社会生活や企業の事業活動の基礎となることを直視し、早い段階で生物多様性を事業に組み込んだ実践的なシナリオを描くことが重要なテーマと位置付けて長期的視点で取り組みを進めてきました。

生物多様性をお客様の価値に置き換えてご提案したり、事業継続戦略の観点からサプライヤーに協力を求めたりといった工夫による継続的な取り組みの成果をご紹介します。



## 生態系に配慮した庭づくり「5本の樹」計画。 年間植栽本数100万本を達成しました

### フェアウッド調達

- ▶ 木材調達ガイドラインとは
- ▶ 木材調達ガイドラインの運用と改訂
- ▶ 環境NGOとの協働
- ▶ 国産材の活用
- ▶ 木材の循環利用

### 「5本の樹」計画

- ▶ 「5本の樹」計画とは
- ▶ 生物多様性活動に関する民間団体への参画
- ▶ 緑豊かな賃貸住宅「シャーメゾン ガーデنز」
- ▶ 分譲マンションにおける緑化の推進
- ▶ 「5本の樹」いきもの調査
- ▶ 「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」
- ▶ 生物多様性サイトの開設

## 木材調達ガイドラインとは

### フェアウッド調達（持続可能性、生物多様性に配慮した原材料調達）



私たちの暮らしや企業活動は、生物多様性の恵みに基づく資源や生態系のもたらずサービスに支えられて成り立っています。特に、大量の木質建材を利用する住宅メーカーとして、貴重な生物由来原料である木材については、持続可能性に配慮して計画伐採され、かつ、社会的にも公正な木材を原料として選択することが重要です。

一棟の住宅で使用される建材  
住宅一棟で使用される部材は5～6万点  
にも及びます。

## 木材調達ガイドラインとは

森林に関しては、海外において違法伐採や過剰伐採が根絶されない一方、国内では木材自給率が上昇に転じたものの、まだ3割以下に過ぎず、伐採されずに放置されて山が荒廃するなどの問題があります。

当社は大量の木材を利用する住宅メーカーとして、これらの問題に取り組むため、合法性や生物多様性を軸に、伐採地住民の暮らしまでを視野に入れた「木材調達ガイドライン」を2007年4月に策定。これに基づき、「フェアウッド」※調達を推進し、調達レベルの向上を図っています。

「木材調達ガイドライン」は10の調達指針で構成され、違法伐採の可能性や樹木の絶滅危惧リスク、伐採地からの距離、木廃材の循環利用、伐採地の先住民にとっての伝統的・文化的アイデンティティ、伐採地の木材に関する紛争など、多面的な視点で調達木材を評価できるようになっています。当社のこのガイドラインは、単に生物多様性への配慮だけでなく、ISO26000の要請する各国の社会的課題への配慮の視点も含む内容として構成したものです。

※フェアウッド：伐採地の森林環境や地域社会に配慮した木材、木材製品のこと。財団法人地球・人間環境フォーラムと国際環境NGO FoE Japanが提唱

「木材調達ガイドライン」の10の指針

以下の木材を積極的に調達していきます。

1. 違法伐採の可能性が低い地域から産出された木材
2. 貴重な生態系が形成されている地域以外から産出された木材
3. 地域の生態系を大きく破壊する、天然林の大伐採が行われている地域以外から産出された木材
4. 絶滅が危惧されている樹種以外の木材
5. 消費地との距離がより近い地域から産出された木材
6. 木材に関する紛争や対立がある地域以外から産出された木材
7. 森林の回復速度を超えない計画的な伐採が行われている地域から産出された木材
8. 国産木材
9. 自然生態系の保全や創出につながるような方法により植林された木材
10. 木廃材を原料とした木質建材

調達レベルの評価 ～指針の合計点で調達ランクを決定

合計点（最大43点）	調達ランク
34点以上	S
26点以上、34点未満	A
17点以上、26点未満	B
17点未満	C

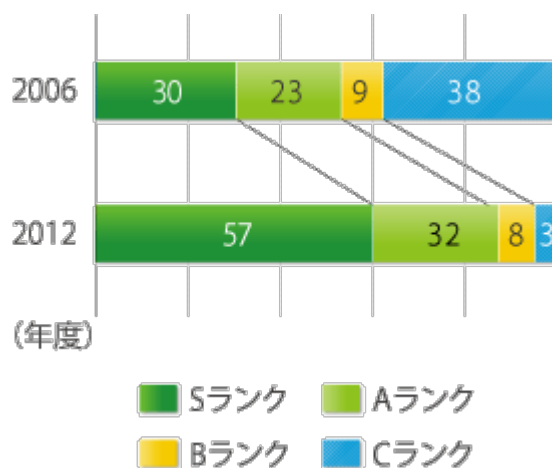
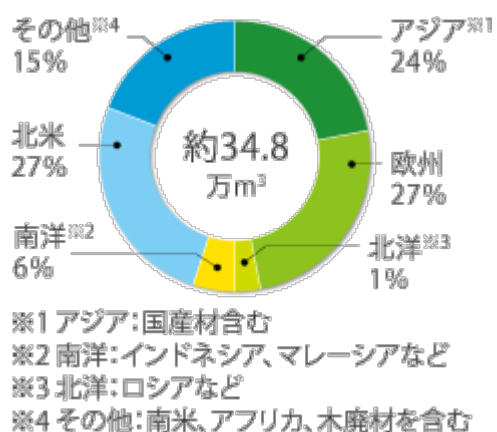
各調達指針の合計点で評価対象の木材調達レベルを高いものから順にS、A、B、Cの四つに分類。10の指針の中で特に重視している1、4に関しては、ボーダーラインを設定。

## 木材調達ガイドラインの運用と改定

### 2011年度の実績

2006年度に策定し2007年度から運用を開始した「木材調達ガイドライン」の5年目となり、多くのサプライヤーがこれを参考に、自社の調達状況の改善を図りはじめています。2012年度はSランク木材の比率は前年度を5%下回ったものの、目標としたS・Aレベルの木材全体では前年から4ポイントアップしほぼ9割に至っています。今後はサプライヤー各社に対してよりキメの細かい改善提案を進めることで質の向上を図っていく予定です。逆に低評価のCランク木材は6%から3%に3ポイント減少するなどの改善が定着してきました。

#### ● 木材調達実績



伐採地域別割合

調達ランクの推移

### ガイドラインの改訂に向けて

ここ数年で、「Sランク木材の増加、Cランク木材の減少」という当初設定した目標が概ね達成しつつあることもあり、2011年度はより高い目標に向けてガイドラインの改訂に着手しました。改訂に際しては、従来よりガイドラインの運営に協力をいただいている環境NGO FoEJapanと森林を巡る世界情勢などを踏まえた検討やサプライヤー各社へのヒアリングを重ねました。

改訂の主眼は、第一に、事業活動における社会性への配慮を要請するISO26000発行を受け「社会性への配慮」の内容をより詳細に再検討したこと。第二に、木材の乾燥工程におけるバイオマスの利用などを積極的に評価し木材のCO<sub>2</sub>削減を評価したこと。第三に、再生材や認証材の一律的な評価について、ケースによっては具体的検証を加味するように見直しを行った点です。

2012年は、こうして策定した新しいガイドラインに沿って実態調査を進めました。ただ、2007年以降これまで運用を続けてきたガイドラインの配点を変更してしまうと、各社の進捗管理に連続性が維持できないとの声も容れて、新たな要素は加点要素として別枠で運用改善に活かすことにしました。

【木材調達ガイドライン（2012年 改訂版）】（一部のみ）

調達指針⑤ … 「生産・加工・輸送工程におけるCO<sub>2</sub>排出削減に配慮した木材」を調達します

◆乾燥工程の使用エネルギー

【趣旨】木材のライフサイクルCO<sub>2</sub>の中で、乾燥工程が占める割合は非常に大きいため、（調達指針⑤の）評価項目とします。

加点	乾燥時のバイオマス利用状況
2点	通常バイオマスの実を利用しているが、時期によっては補助的に重油を使用することもあるなど、乾燥熱源の過半数以上でバイオマスなど非化石燃料を使っている。
1点	乾燥熱源の過半数以上は化石燃料だが、過半数に届かないまでも、一定量のバイオマスを使用している。もしくは、バイオマスを活用する時期がある。
-1点	バイオマスを使うこともあるが、ごくわずかで、ほとんど使っていない。もしくは、バイオマスを使っていない。／乾燥時に使っている熱源が不明

調達指針⑥ … 「森林伐採に関する地域住民等との対立や不当な労働慣行を排除し、地域社会の安定に寄与する木材」を調達します

◆木材調達における人権擁護や不当な労働慣行の廃止、伐採地の地域社会の安定などに関する取組み

【趣旨】木材調達のさまざまな段階で（調達指針⑥のような）社会秩序を乱すマイナス面が大きな課題としてありますが、一方で、労働者の人権擁護や不当な労働慣行を見直す動きも始まっています。また、代々受け継がれてきた森林と共生する林業や、小規模農業と組み合わせることで木が育つまでの収入を確保するアグロフォレストリー（混農林業）など、地域社会の安定を維持する取組みも広がってきています。

加点	
1点	人権や労働慣行に関する企業方針や調達指針等、明文化された文書があり、取引先含め、共有されている。
1点	人権や労働慣行に関する訴訟や通報に対応できる仕組み（組織、システムなど）を構築しており、過去10年間に重大な訴訟や通報が無いことを確認できている。
1点	コミュニティ林業やアグロフォレストリーなど、伐採地住民の主体的な森林経営に貢献する木材調達を行っている。

## 環境NGOとの協働

当社がこの「木材調達ガイドライン」を策定するに際して注意したのは、自社の独善的なガイドラインに流れないように客観性を確保しつつ、作成過程の透明性を担保すること。そのために、世界の木材の生産にかかわる最新の状況を把握しつつ、各サプライヤーの抱える現実的な課題を踏まえて、国際環境NGO FoE Japanとの検討を重ねてきました。

NGOとの協働は制定だけに留まらず、実際の運用段階における検証依頼や相談、そして本年度の改訂作業につながっています。例えば、2011年度においても、2010年11月1日にISO（国際標準化機構）による国際規格であるISO26000の発行を受けて、木材生産地における住民の生活安定など社会性への配慮についてNGOから最新の状況説明を受け、これに基づく何回もの協議を経てガイドラインへの現実的な反映の検討を重ねました。

また、当社からも、温暖化防止のために木材の乾燥工程における重油の利用等についてのサプライヤーの現状を説明し、バイオ利用の加点評価の可能性について世界の先進事例についての報告を受けて、議論を行う等、極めて高い運用レベルへの反映にまで踏み込んで、意見交換を行っています。

こうした流れを受けて、2012年度も、前年度に続き「木材調達ガイドライン」の改訂について意見交換を重ね、ガイドラインの内容を確定しました。さらに、改訂したガイドラインに基づいて木質建材のサプライヤーへの実態調査を行った際の回答内容に関しても、新しい伐採地や樹種についての評価依頼などではじめとする様々なアドバイスを頂きました。

「資材調達」という企業の本丸に属する部分についても、こうした本音の意見交換ができるようになってきていることは、企業にとっても世界標準の異なる価値観を認識して事業への反映可能性を検討する貴重な機会となっています。

また、近時は個々のサプライヤーから、自社においても木材調達のあり方についての改善を進めるに際してNGOを紹介して欲しい、といったケースも現れ始めており、当社が築いたNGOとの信頼関係は、サプライヤーにも波及しはじめています。



国際環境NGO FoE Japan  
事務局長  
三柴 淳一 様

## さらなるサプライチェーンの強化を

「継続は力なり」。2007年から継続した「木材調達ガイドライン」の真摯な運用は、いまや木材の長いサプライチェーンの上流にまで波及する大きな影響力を発揮するに至っています。2012年度からは、今後ビジネス界において重要なキーワードになるであろう「人権」や「天然資源等の生産地周辺の社会的な影響」などに配慮するエシカル調達にも着手し、その取り組みを深化させています。社会的側面への配慮には、サプライヤーのみならず、政府やNGOなど様々な方面からの情報入手が不可欠ですが、そうした取り組みが実現した背景には、環境配慮に対する確たる意思と、環境NGOなど外部の意見にも真摯に耳を傾けるオープンマインドが功を奏しているのだと思います。

今後も流行に左右されない本業における真摯でぶれないガイドラインの運用に大きく期待しています。

## 国産材の活用

国内の森林経営の健全化や、木材輸送に起因するCO<sub>2</sub>排出量の削減を考慮し、当社は国産材を活用した合板の積極的な導入をはじめ、国産広葉樹の内装部材に活用するなど、活用の幅を広げてきました。

こうした取り組みも奏効し、ここ数年当社の木材使用量全体に占める国産材の割合は増加傾向にありましたが、2011年度は12%と前年比7ポイントダウンしました。これは、被災地に集積されていた合板メーカーの多くが営業停止を余儀なくされていたことが影響したものです。2012年度についても大幅な回復は見られず、1ポイント上昇して13%に留まりました。

従来、国産の木材については零細な事業者が多く大量かつ安定的な供給が難しかったこともありハウスメーカーにおける積極的な採用は容易ではありませんでした。しかし、戦後植林された国内林が伐採に適した時期を迎えて、国等の支援や指導に基づく新たな生産システムの普及なども進みつつあることから、当社でも、地域の導入可拡大に向けて、供給の安定性、品質やコストなど検討を重ねてきました。

こうした検討の結果、2011年度はこうした諸要素を満たす地域では秋田スギなどいわゆる「銘木」を中心に、従来の合板などに加え、それを採用した集成材の採用も行い、お客様の希望によって一部の地域で導入いたしました。

2012年度もその取り組みを進めましたが、2013年2月にはより具体的な展開として、奈良県との間で、奈良県産材を積極的に利用することで地域の林業・木材産業の活性化を図り、活力ある地域社会の実現を目指すとともに、森林を健全な状態で次世代に引き継ぐための「連携協力に関する協定」を締結しました。



奈良県との協定書調印式

協定は、奈良県知事と当社の関西第二営業本部長(京都府・滋賀県・奈良県・北陸3県・兵庫県の一部を管轄)が締結し、3月にオープンしたシャウッド奈良展示場では吉野スギの集成材の柱をインテリアのアクセントとしたり、2階和室を奈良県産材の展示スペースとし、吉野スギ・吉野ヒノキを使用した造作材を使用した内装のアピールができる展示をしています。こうした地場の銘木に関心をお持ちのお客様に対してメニューの充実を図ることにより、お客様満足度の向上にもつなげていくことを目指しています。

また、単一種の常緑針葉樹林に比べて、落ち葉による腐葉土で昆虫や微生物が繁殖しやすいなど生態系保全の効果が高いにもかかわらず、植林された針葉樹と比べて市場への大量の供給が難しいために十分な活用がされてこなかった「落葉広葉樹」についても、樹種によって異なる木目の意匠性を生かした内装材の企画開発を進め、親自然の意識の高いお客様のご要望に応じて展開を進めています。



【国産広葉樹 内装手すりの採用例】



## 木材の循環利用

木材の利用に関しては、バージンの木材を適切に評価し、植物の樹種や産地、生育速度に配慮しながら伐採することで持続可能な利用を行うアプローチに加え、世界的な木材資源の逼迫を考慮すると、木廃材の有効活用にも取り組む必要があります。

近年の技術発達に伴い、建設廃材や製造工程で排出される木廃材などを再生木材として新たな木質製品を、用途に応じて効果的に活用することで、違法伐採木材などの調達の危険性を間接的に回避することにもなるからです。

ただ、こうした木材の需要の高まりに応じて、実際には再生木材の原料として利用される木材にも、一度ほかの用途に使用された木材や廃棄された木製品を原料とすることなく、バージン木材をチップとしたものが相当数存在することが明らかとなってきました。

そこで、2012年度には見直しを行った「木材調達ガイドライン」においても、再生木材のうち、特に「パーティクルボード※」については、従来のように木廃材を原料とするとの一事をもって、最上位の「S」レベルと評価するのではなく、材料調達プロセス等迄検証して個別に評価するといった方向で見直しました。

(見直した調達指針 項目)

調達ランク	解説
Sランク	よりレベルの高い資源循環に寄与するシステムや技術を開発し、主として廃棄処分された木製品や建設解体廃材など再資源化が困難な木廃材を活用した木質建材
Aランク	主に廃棄処分された木製品や建設解体廃材など再資源化が困難な木廃材を原料としている。一般的なパーティクルボード

※パーティクルボードとは、木材その他の植物繊維質の小片(パーティクル)に合成樹脂接着剤を塗布し、一定の面積と厚さに熱圧成形してできた板状製品のこと。

### 関連項目

- [木材調達ガイドラインとは\(P.239\)](#)

## 「5本の樹」計画とは

「5本の樹」計画とは、2001年から進める、生態系に配慮した庭づくり・まちづくりの提案です。人が適切に手を入れることによって生態系の豊かさを維持する「里山」をお手本に、庭づくりや庭の手入れにもこの仕組みを生かして、各地の気候風土に適した自生種・在来種を中心に植栽しています。2012年度の植栽実績は101万本で、2001年の事業開始以降の累計植栽本数は913万本となりました。



「5本の樹」による生態系ネットワーク

都市に、小規模でも野鳥や蝶などの生き物が活用できる庭や街路を設けると、こうして点在する空間が連なって小動物を支えるネットワークを形成して生態系保全につながります。こうした空間は、同時に住まい手も自然の豊かさを楽しむことができるようになります。

## 「5本の樹」計画の植栽例



## 「5本の樹」計画の成果

緑量のバランスを考慮した「5本の樹」計画の庭は、生き物が生息しやすい環境をつくるだけでなく、住まい手にも種々のメリットをもたらします。例えば、野鳥のえさ場となる実のなる落葉広葉樹は夏には緑陰によって強い陽射しを遮るだけでなく葉の蒸散作用で冷気を生み出し、冬は葉を落とした枝の間から暖かな日差しを住まいの中に取り入れて冷暖房エネルギーの削減に貢献してくれます。また、常緑樹は一年中緑の風景を保ち小さな野鳥たちが猛禽類などから身を隠す避難場所になりますが、そこに住まう人にとっては通りからの目隠しとなってくれます。

豊かに整備された緑化は、時間の経過と共に成長して住環境への愛着をはぐくみ、住まいやまちの資産価値を高め、「経年美化」を実現する重要な要素となっています。

## 年間植栽実績の推移



## 生物多様性活動に関する民間団体への参画

### 「企業と生物多様性イニシアティブ（JBIB※）」への参画

生物多様性条約（CBD）では、生物多様性の保全と持続可能な利用の実現等、条約目的の実現について、民間部門の重要性が強調されています。「JBIB」は、2008年4月1日に、当社のほか、国内で生物多様性の保全および持続可能な利用に積極的に取り組む企業が集い、設立され、2012年6月には一般社団法人となりました。参加企業は2013年1月現在、本会員34社、ネットワーク会員15社に上り、企業が主体となって連携した活動が行われており、当社は理事企業として活動のサポートをしています。

生物多様性の保全に関する共同研究を実施し、その成果をもとに他の企業やステークホルダーとの対話を図ることで、真に生物多様性の保全に貢献するWG活動を展開しており、2012年度は生物多様性に配慮した土地利用の考え方や処方箋を示し、取り組みの成果を可視化することで、生物多様性に配慮した土地利用を促進することを目的として、いきもの共生事業所R推進ツール3点セットを開発し、一般向けに講習会を行うなどして普及を進めました。

#### 関連項目

■ [企業と生物多様性イニシアティブ（JBIB）のHPはこちら](#) □

※JBIB（Japan Business Initiative for Biodiversity）

### 日本経団連等「生物多様性民間参画イニシアティブ」、「生物多様性民間参画パートナーシップ」への参画

生物多様性条約第9回締約国会議（COP9）では、開催国ドイツ政府の主導で「ビジネスと生物多様性イニシアティブ（通称：B&Bイニシアティブ）」が提唱され、当社は日本企業9社のうち1社として、2008年に参画に署名しました。

その後、幅広い業種でさまざまな規模の事業者が生物多様性に関する取り組みに参画し、その裾野を拡大していくことが必要として、2010年5月25日、生物多様性の保全および持続可能な利用等、条約の実施に関する民間の参画を推進するプログラム「生物多様性民間参画イニシアティブ」が、10月にはその活動主体となる「生物多様性民間参画パートナーシップ」が設立されました。

これは、日本経済団体連合会、日本商工会議所および経済同友会等、経済界を中心とした自発的なプログラムとして、国際自然保護連合日本プロジェクトオフィス、農林水産省、経済産業省および環境省と協力されたもので、パートナーシップ参加事業者会員は2012年10月時点で438事業者、21経済団体、27NGO、15公的機関組織に及び、当社もこれに加盟しています。

## 緑豊かな賃貸住宅「シャームゾン ガーデنز」

### 「5本の樹」を生かして エクステリアで賃貸住宅の質を向上

当社は、「5本の樹」計画の考え方を、賃貸住宅のエクステリア提案でも生かしています。特に、「シャームゾン ガーデنز」と名付ている賃貸住宅では、敷地に広がりがあるため、植栽計画は重要な意味を持ちます。当社は、まちや自然、暮らす人の観点から敷地環境を高める「5つの環境プレミアム」（①街並みとの調和 ②自然環境の保存と再生 ③環境負荷への配慮 ④快適性を高める設計 ⑤安心・安全をもたらす設計）を新たな指標とし、建物とともに敷地全体で良好な環境を創造しています。



#### ■周辺環境との調和を図り、「まちの財産」にする

「シャームゾン」の計画地では、周辺環境との調和がまちなみの美しさに影響します。敷地全体で建物と調和する緑豊かな共有空間をデザインし、その土地の魅力を最大限に引き出しながら物件の魅力を高めることで、地域に溶け込む「まちの財産」をつくります。

#### ■緑化率を高め、環境価値の向上につなげる

入居者にとっても、緑豊かな環境は心地よく暮らすための大切な要素です。緑化率10%以上を目標に、経年美化を実現する緑の環境づくりに努めます。また、建物は住棟間の距離や窓の配置などに工夫し、樹木も生かして外部からの視線を自然に遮ることができるよう、プライバシーにも配慮します。

## ■緑の共有スペースで、コミュニティを育てる

入居者同士の自然な交流をはぐくむコモンスペースや、近隣の人々とのふれあいを生むようなオープンスペースなどを、それぞれの敷地に合わせて計画。コミュニティづくりに有効な、緑豊かな共有空間を効果的に配置します。



高低差を魅力に変えた  
立体感のあるエントランス



コミュニティを育む緑豊かな  
「コモンスペース」

## 分譲マンションにおける緑化の推進

従来のもちづくりでは、マンションは地の利と利便性が最大のポイントで、植栽などの緑化はむしろ計画コストや管理費に影響を与えるものとして敬遠され、エントランス部などに外来種の常緑樹中心に最低限の植栽が施工されることも少なくありませんでした。

積水ハウスでは、2001年に戸建住宅や大規模分譲地から「5本の樹」計画に基づく緑化を開始しました。緑化がまちの価値を高め、住まい手にとっても快適性を高め魅力をアップする重要な要素であることを全社で共有し、分譲マンション事業においても緑化を推進し、近年は緑被率20%を目標として事業を推進しています。

こうした取り組みの結果、緑被率の高さは積水ハウスの分譲マンション「グランドメゾン」の大きな特徴として評価されています。2012年度の緑被率は平均で約27.5%となっています。

共同住宅であるからこそ、共有部の豊かな緑は入居者の心を癒し、住民同士のふれあいの場としても、その付加価値を高める重要な意味を持つと考えています。

### グランドメゾン白金（東京都港区白金）

江戸時代には大名屋敷が建ち並び、現在も高級住宅地として知られる「港区白金」。充実した都心機能と穏やかな住環境を両立する場所に「グランドメゾン白金」は誕生しました。

メインエントランスにはたいら桜石の石積みにイロハモミジ、シラカシ、ヤマボウシ等を配することで都心に里山の風景を再現するとともに、中庭には庵治石と植栽の調和により周囲から切り取られた風景を演出し、四季の移り変わりを感じることができる空間を創出しました。またセットバックした屋上にも植栽帯を多く設けることで、上層階の共用廊下からも緑を楽しむことができ、緑被率は21%に達しています。

【敷地面積 1,945.76m<sup>2</sup> 53戸、2012年12月竣工】



外観



エントランス

## グランドメゾン千里中央東丘（大阪府豊中市）

「グランドメゾン千里中央東丘」は千里中央駅から緑豊かな歩行者専用道路を東へ歩くこと約10分。東西に2つの広大な公園に囲まれる場所にあります。細部まで人の動線と視線を意識した壮大なランドスケープ。東西の公園とつながる広大な森をイメージしながら、敷地の約43%にあたる約5,300m<sup>2</sup>もの「家族の森」を創出しています。

メインエントランスに続く西側のフロントガーデンにはシンボルツリーのケヤキをはじめ、鳥や蝶が好んでやってくる樹種を配置。また、もともとこの地の歴史を見守ってきた既存樹木を移植し、地域の「おもいで保存樹」としています。

東側の敷地辺縁部にはコナラやシラカシなど、公園とのつながりに配慮した樹種を選択。スケールの大きな「緑の軸」を発想し、家族の森と公園の森を結ぶ計画としています。鳥や蝶などの野生動物が森から森へと自在に渡って豊かな自然を紡ぐ「緑の軸」ができることにより、千里丘陵の「里山」原風景の再生を目指しています。

共用棟の屋上には人工地盤上に芝を張り、気候風土に合った樹木を植えることによる緑化を施しました。散策路は里山の小路をイメージし、屋上であることを意識させない工夫をしています。

【敷地面積 12,148.19m<sup>2</sup> 246戸、2012年9月竣工】



全景



エントランス付近



## グランドメゾン百道浜Villa（福岡市早良区）

海沿いの緑地帯からの緑の連続性を考慮して、敷地の周囲は塩害に強い樹種で覆うように計画。エントランス前にはシンボルツリーのケヤキを中心とした豊かな緑に加えベンチを設け、向かいに連なる戸建エリアとの広々とした交流の場を提案しています。

エントランスを開けると、視界が一瞬に解き放たれ、目の前に光と緑の別世界。集合住宅の住人に戸建感覚を味わっていただくために設えた雑木林。雑木林沿いのエレベーターホールへと続くコリドーは、徐々にプライベートゾーンへと住人をいざないます。

緑被率は敷地の23%。実に4,000本以上の樹木を植栽しています。

【敷地面積 2394.06m<sup>2</sup> 45戸、2012年6月竣工】



外観



中庭

## 「5本の樹」いきもの調査

2012年度は、昨年に続き、大規模な埋め立て人工島である「福岡アイランドシティ」で延べ2回の調査を実施しました。

「5本の樹」いきもの調査は、専門家との協働で2008年9月から実施しているもので、「5本の樹」計画のまちづくりの前後で、生き物の数を調査し、周辺環境との違いや、経年による変化を記録し、その効果を検証するものです。

「福岡アイランドシティ」の、2005年から複数の街区ごとに順次分譲を開始した当社分譲エリアでは、昆虫7目20科46種（昨年度：昆虫7目16科34種）が、鳥類6目14科19種（昨年度：4目9科9種）が確認されました。一般の既成市街地に生息する種のほとんどが確認されており、埋め立てによる分譲地であっても、適切な植栽樹種の選択と街区デザインにより、地域の生態系は着実に回復していると評価できました。

また、分譲地エリアでは、初めて小鳥類を主食とするハイタカの生息が確認され、小鳥の個体数が増加していることが示唆されたり、昆虫類などを捕食するカナヘビも初めて確認される等、「5本の樹」の効果が現れていることが推察される結果となりました。また、シジュウカラが石垣の隙間を巣穴として利用していることが確認され、石組みについてもコンクリートで固めてしまわない「空積み」の手法を採用するなどしたまちづくりにおける工夫の効果も確認されました。



いきもの調査実施中の様子



生垣のウバメガシについたハマキガ科の幼虫を捕食するシジュウカラ



シジュウカラが営巣していた石垣の隙間

## 「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」

当社は、「5本の樹」計画を通じて、住宅の庭先からの生態系保全を呼び掛けています。

多くの方に身近な鳥や蝶にもっと親しんでもらい、自然保護意識、環境意識の向上を図るために、携帯電話から樹木やその樹木に集まる鳥や蝶の情報が入手できる「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトを開発し、普及に努めています。

本物の鳥の鳴き声と写真が確認できるため、いわば「携帯版ポケット自然観察図鑑」として活用されています。

2009年7月には「第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）」（主催：NPO法人キッズデザイン協議会）を受賞しました。

毎日100人以上の方にご利用頂いており、2012年度は年間4万4000件の利用がありました。

「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトを運営

鳥や蝶、樹木の名前を知らなくても形や大きさ、色の特徴から検索可能。鳥は鳴き声を再生して確認することができます。

- 鳥24種 (鳴き声も)
- 蝶24種
- 樹木92種

掲載

鳴き声が聞ける

■ サイトトップページからアクセス ■ QRコードからアクセス

<http://5honnoki.jp>

## 生物多様性サイトの開設

### 生物多様性に特化して関係する情報を一元的にまとめたサイトを開設

当社では、「サステナブル宣言」に基づき、持続可能な社会の構築に向けて生態系、生物多様性への配慮を事業の重要な軸として取り組みを進めてきました。

具体的には、生き物にとって活用価値の高い地域の在来樹種を活用した造園緑化事業「5本の樹」計画、生物多様性にも配慮した「木材調達ガイドライン」、本社ビルがある「新梅田シティ」内に「新・里山」を造成、活用するなど、様々な活動を実施しています。

こうした当社の「生物多様性」に関する取り組みに対しては、社外からも様々な顕彰をいただいていたのですが、情報を一覧できるサイトが無かったため多くの方に容易にアクセスしていただけるように、生物多様性に関係する情報を一元的にまとめた「生物多様性サイト」を開設、運用しています。

主人公のカエルが生物多様性を紹介するフラッシュ画面や、「ストップ温暖化『一村一品』大作戦2010」（主催：環境省、大会事務局：全国地球温暖化防止活動推進センター）の全国大会において"銅賞"を受賞した、「新・里山」の四季の移ろいやそこで見られる生き物の現状を紹介するブログを設け、親しみやすいサイトになっています。



積水ハウスの「生物多様性」サイト。

カエルが登場して、生物多様性の重要性を解説します。

### 関連項目

[生物多様性サイトはこちら](#)